社会と人間（3）

マルクスの歴史社会学
＜ウェーバーとの対比＞

山　田　隆　夫

問題の提示

1．マルクスは1883年に死去した。その後まもなく，マルクス主義は，一つの理論を表わすようになった。この理論では，経済とその他の「物質的」要因が社会構造と歴史過程を説明する。この理論が，マルクス主義者たちとその批判者たちとの有力な見解であった。広く信じられているが，マルクスとエンゲルスとは，非情な自己利益が個人，階級，そして国民を支配する，そして世界を前方に駆動すると提唱している。数世紀をとおして，人民の歴史は，変化する，複雑な，厳密に物質的諸原因の相互作用によって説明されるべきである。こうして，マルクス主義は一要因理論 (one-factor theory) に還元されている。

2．同時に，マルクス理論は，彼の後継者たちによって，もう一つの点で変化させられた。マルクス理論の経済的発展と社会階級構造との関連の焦点は，技術的決定主義の一つの形態に還元されている。こうして，経済的・歴史的変動は，労働用具の技術的変化に直接に依存することによってなされている。生産の重要な要素上の変化――新素材や石油の発見――は，歴史の運動を決定するといわれる。

3．時間がたつにつれて，経済決定主義と技術決定主義との両方は，一面的で誤りに導くとみなされるようになった。有名なマルクス主義者たち

が，顕著な非マルクス主義思想家の影響のもとに，「俗流マルクス主義」の諸形態を非難し，創始者の観念の基礎的歪曲として彼らをあばいた。これら批判者たちの努力はおおいに成功した。というのは，批判者たちは，歴史についてのマルクスの概念の原初的複雑性を有効に再構成したからである。非マルクス主義的思想家たちの影響のもとに，マルクス主義は「開かれた」，非独断的理論的アプローチとみなされるようになった。この見解の支持者たちは，相対的に自立的な社会の非経済的領域の意義を強調した。さらに歴史の創造における人間の意識と意志の役割を叙述した。

4．しかしながら，最近の数年間に，「開かれた」見解は，攻撃にさらされている。マルクス観念の旧型の，決定論的，叙述への復帰がある。マルクスの社会思想の最近の数年間の研究は，マルクスに，狭い技術主義的な「生産力」決定主義を帰せしめている。

5．最近の解釈は，19世紀後期，20世紀初期の解釈に似て，1859年のマルクスの，「序言」の中心点と考えられている点に立脚している。このテキストを，後で細詳に研究しよう。

W. H. ショウ（W. H. Shaw）は「技術決定論的解釈」を公然と宣言した。他方G. A. コーエン（G. A. Cohen）は，「技術論」的ラベルを採用する。しかし，「決定論」的ラベルを採用しない。ちなみに，G. A. コーエン（G. A. Cohen）はつぎのように申し立てる。「マルクスには，……歴史は人間の能力の発展である，しかし，その発展の過程は人間の意志に従属するものではない。」[1]（p. 148）。あとでみるとおり，マルクスの「序言」では，彼は「生産力」と「生産関係」について語っている。そして彼は社会の，経済構造について，「現実の土台」（あるいは）「基礎」であるといっている。その上に「法律的・政治的・上部構造」がそびえたっている。ショウ（Shaw）とコーエン（Cohen）の二人はともに，単純な，機械論的「primacy thesis」（第一原因テーゼ）を承認している。この第一原因説では，「土台」が，歴史的発展の原因であり，「上部構造」は結果である。コーエン（Cohen）にとって「第一原因」（Primacy）は「直線性」（unidirectional/ity）（p. 137）を意味する。こうして，彼は，『弁証法』（pp. 138, 145）

あるいは「生産力」と「生産関係」の相互関係を拒絶している。しかしながら，コーエン（Cohen）は，「関係」が，「諸力」を条件づけることを認めている。そこから，ショウ（Shaw）とコーエン（Cohen）とは信じている。社会変動と革命を説明するために，土台と上部構造の関係の客観的分析が必要であろう。

5．このような機械的マルクス主義への復帰は示唆している。オリジナル・テキストのさらに別の見方を考察することが必要である，そして，鍵になる問題に体系的にとりかかることが必要であるということである。

有名なマルクスの「序言」

1．マルクスは，1856年に，「政治経済学批判のためのに」の序言を書いている。序言はいままで，マルクス理論の最も簡潔な定式化とみなされてきている。最近のマルクス解釈は，この序言をマルクスの歴史概念の典拠（Locus classicus）であるとして取扱ってきた。それゆえ，テキストは全体を引用する価値がある。

「私の研究の到達した結果は次のことだった。すなわち法的諸関係ならびに国家諸形態は，それ自体からも，またいわゆる人間精神の一般的発展からも理解されうるものではなく，むしろ物質的な諸生活関係に根ざしているものであって，これらの諸生活関係の総体をヘーゲルは，18世紀のイギリス人およびフランス人の先例にならって，「市民社会」という名のもとに総括しているのであるが，しかしこの市民社会の解剖学は経済学のうちに求められなければならない，ということであった。パリで始めた経済学の研究を私はブリュッセルでつづけた。ギゾー氏の追放命令の結果，同地へ私は移ったのであった。私にとって明らかとなった，そしてひとたび自分のものとなってからは私の研究にとって導きの糸として役だった一般的結論は，簡単にいえば次のように定式化することができる。人間は彼らの生活の社会的生産において，一定の，必然的な，彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはい

る。これらの生産諸関係の総体は，社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台である，その上に一つの法律的および政治的上部構造がそびえ立ち，そしてそれに一定の社会的諸意識形態が対応する。物質的生活の生産様式が，社会的，政治的および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく，彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会の物質的生産諸力は，その発展のある段階で，それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係と，あるいはそれの法律的表現にすぎないものである所有関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は，生産諸力の発展諸形態から桎梏に一変する。そのときに社会革命の時期が始まる。経済的基礎の変化とともに，巨大な上部構造全体が，あるいは徐々に，あるいは急激にくつがえる。このような諸変革の考察にあたっては，経済的生産諸条件における物質的な，自然科学的に正確に確認できる変革と，それで人間がこの衝突を意識するようになり，これとたたかって決着をつけるところの法律的な，政治的な，宗教的な，芸術的または哲学的な諸形態，簡単にいえばイデオロギー諸形態とをつねに区別しなければならない。ある個人がなんであるかをその個人が自分自身をなんと考えているかによって判断しないのと同様に，このような変革の時期をその時期の意識から判断することはできないのであって，むしろこの意識を物質的生活の諸矛盾から，社会的生産諸力と生産諸関係とのあいだに現存する衝突から説明しなければならない。一つの社会構成は，それが生産諸力にとって十分の余地をもち，その生産諸力がすべて発展しきるまでは，けっして没落するものではなく，新しい，さらに高度の生産諸関係は，その物質的存在条件が古い社会自体の胎内で孵化されてしまうまでは，けっして古いものにとって代わることはできない。それだから，人間はつねに，自分が解決しうる課題だけを自分に提起する。なぜならば，もっと詳しく考察してみると，課題そのものは，その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか，またはすくなくとも生まれつつある場合にだけ発生することが，つねに見られるであろうからだ。大づかみにいって，アジア的，古代的，封建的および近代ブルジョア的生産諸関係は，社会的生産過程の最後の敵対的形態である。敵対的というのは，個人的敵対という意味で

はなく，諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対という意味である。しかしブルジョワ社会の胎内で発展しつつある生産諸力は，同時にこの敵対の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。したがってこの社会構成でもって人間社会の前史は終わる。[2]」（マル・エン全集⑬大月書店，6—7頁。）

読書が気づくように，マルクスは，ここで，経済的「土台」と法律的，政治的「上部構造」について語っている。マルクスは，さらに前進しつぎのように言う，「生産様式」が生活の社会的・政治的そして精神的過程の一般的性格を決定する，そしてもっとも明白な仕方で主張する，社会的意識を決定するのは社会的存在であると。マルクスは，また，社会変動をひき起こす点で，「生産力」に因果的第一義性（causal priority）を与えていることははっきりしている。そこで，彼の後継者たちと批判者たちは，つぎのような誤解のもとで働き続けたことは明らかである。マルクスは経済的決定論を提唱している。そこでは，「土台」が原因であり，「上部構造」は結果である。

2．フリードリッヒ・エンゲルス，マルクスの盟友であり共著者であるが，これまた彼らの見解の誤解に貢献している。マルクスの死後，エンゲルスは彼らのいわゆる唯物論的歴史概念は広く誤解されていることを発見したときに，数本の手紙を書いて彼らの立場を明白にしようと企てた。この手紙はマルクス派の研究者たちのあいだでは，今日までによく知られるようになったものである。ヨーゼフ・ブロッホ（J. Bloch）にたいして彼は書いた。

「経済状態は土台です。しかし上部構造のさまざまな諸要因——階級闘争の政治的諸形態と，闘争の結果——たたかいを勝ちとったのちに勝利した階級により確定される等の諸制度——法形態，はまたこれら現実の諸闘争すべての，これに関与した者たちの頭脳への反映，すなわち政治的，法律的，哲学的諸理論，宗教的見解とその教義体系への発展が，歴史的な諸闘争の経過に作用をおよぼし，多くの場合に著しくその形態

を規定するのです。それはこれらすべての要因の相互作用であり，そのなかで結局はすべての無数の偶然事（すなわちその相互の内的な関連があまりにもへだたっているか，またはあまりにも証明不可能であるために，われわれとしてはそのような内的連関が存在しないとみなし，無視することができるようなものごとや事件のことです）をつうじて，必然的なものとして経済的運動が貫徹するのです。そうでなければ，ある任意の歴史上の時代への理論の適用は，簡単な一次方程式をとくよりもやさしいことになるでしょう。」[3]（マル・エン全集㊲402頁。）

そして，H. スタルケンブルグ（H. Starkenburg）にたいして，エンゲルスは書いている。同じ文脈であろう。

「政治的，法律的，哲学的，宗教的，文学的，芸術的などの発展は，経済的発展に立脚しています。しかしそれらの発展はまたすべて，相互に反作用します。経済的状態が原因で，それだけが能動的で，他のものはすべて受動的な結果にすぎないというのではありません。そうではなくて，究極的にはつねに自己を貫徹する経済的必然性という基礎のうえでの相互作用なのです。」[4]（マル・エン全集㊴185—186頁。）

ここでわれわれは，確認する。エンゲルスは一方で，「土台」と「上部構造」との何らかの相互作用を認めている。しかし他方で，エンゲルスの二本の手紙は主張している。究極的には，経済的条件が自己を貫徹する。これらの手紙の効果は，経済的条件の因果的第一義性を再宣言することであった。

3．エンゲルスの手紙（問題に関する他の多くの発言のなかでも代表的なものであるが）と「序言」でのマルクス自身の定式化に照してみれば，次のように言っても，われわれは正当化されるであろう。すなわち，マルクスとエンゲルスの二人は，彼らの見解の広くひろがっている一貫した誤解に共に責任を分ちあわねばならないということである。これだけで全部ではない。エンゲルスとマルクスはまた，次のような現象にも責任を分かち

あわねばならない。すなわち，彼らは社会的進化論者であるということ，そして，彼らと，他の19世紀の社会進化論者との唯一の相違はつぎのことである。すなわち，マルクスとエンゲルスとは，「生産様式」を進化論的変動のモーターとして予定していたということである。「予言」において，マルクスは述べている。「アジア的，古代的，封建的および近代ブルジョア的生産様式が経済的社会構成のあいつぐ諸時期として表示されうる。」（マル・エン全集⑬7頁)。そこで，われわれは，研究問題として次の問題を追加しよう。実際に，マルクスとエンゲルスは進化論者であったかどうか。

4．いうまでもなく，われわれは「序言」やエンゲルスの手紙をかんたんに忘れることはできない。しかし，われわれは，多数の評論家がしているようには「序言」の中心性を当然のことと考えるわけにもゆかない。序言の重要性に接近し，そうして，その秘密を探り出す信頼できる唯一の道は，それをマルクスの学問の著述の全体の文脈の中に位置づけてみることである。この方法によってのみ，われわれは，何故にマルクスが，序言で彼がしたように，自己を表現したかということを学習することができるであろう。またそのような方法によってのみ，われわれは，ある種の suprahistorical theory をマルクスが本当に提案しているかどうかを学習することができるであろう。この suprahistorical theory においては，経済的条件，「生産力」が，どこでも，いつでも，歴史の発動力を形づくっているというのである。それゆえ，われわれの順序は，マルクスとエンゲルスが，歴史上，主要な生産様式あるいは社会経済的時期を論じた，テキストを検討することになるであろう。そこで，われわれは，これらのテキストが序言の適切な解釈にとって何を意味するであろうかを尋ねることであろう。

注

①参照，William H. Shaw, Marx's Theory of History (Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1978), and G. A. Cohen, Karl Marx's Theory of History: A Defense (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1978). 引用してある言葉は，Shaw の本の5頁。Cohen の本の29頁にある。これらの本のページ数で以下引用し，（　）内に示してある。

② Karl Marx, A contribution to the Critique of political Economy (Chi-

cago: Charles H. Kerry 1904), pp. 11–12. マル・エン全集⑬大月書店6－7頁。

③ Karl Marx and Frederick Engels, Selected Works, 2 vols. (Moscow: Foreign Languages publishing House, 1951), Vol. II, p. 443. ここではMESWとして引用されている。

④ MESW Vol II, p. 457.